

OB探訪

昨年10月の衆院選で初当選した希望の党の伊藤俊輔氏(38)＝比例東京＝は桐蔭横浜大を卒業し、中国の北京大に留学、25歳で中央大学経済学部^{きやうべん}に編入学。3年次からの2年間を多摩キャンパスで学んだ。

編入学の目的は「地方自治を勉強したかった。政策としては道州制ですね。その第一人者が佐々木信夫教授で、中大経済学部で教鞭をとっておられた」と伊藤議員。専門性をより高めるため、佐々木ゼミの門をたたいた。

ゼミでは他大学とディベートを戦わせたこともある。あるときは学生が閣僚となって答弁した。「佐々木先生から大臣に任命されました」と照れ笑いました。

年下のゼミ生と交流し、就職活動などの相談に乗り、同じ編入生と意見交換した。「編入生にはそれぞれの専門分野があり、目標を持って勉強しています。話をするのが楽しかったです」

人生設計の主軸においたのは政治家と会社経営。編入学と同時に起業し、学生と社長の二足のわらじをはいた。

2年計画を立てた。初年度の3年次で全単位を修得、4年次をフリーとし、次に生かす1年とする。

授業やゼミが終わるとパソコンを取り出して会社経営に切り替える。「いま学んだことをこの仕事にどう生かすか」。頭脳はフル回転。「起業して間もない頃です。顧客対応や営業などに追われていました」。連日多忙な日が続いた。

留学先の北京大では、諸外国が日本をどう見ているかを知った。外国勢が日本をよく研究していることも分かった。

保険が授業のテーマになったときだ。中国人学生やほかの留学生らは日本の保険制度をよく知っていて、びっくりしたという。

国際的視野で人々の暮らしから世界情勢までを見るようになり、北京留学で「人生観が変わりました」と明言した。

北京でホップし、中大編入学でステップ、そして国会議員へジャンプしていったのだろう。

中大編入から国政へ

政治家への道は、政治家を育成する「維新政治塾」―2012年12月開講の1期生入塾から始まった。33歳だった。

挑戦から5年で 伊藤俊輔



初当選

衆議院議員

昨年の衆院選で街頭演説する伊藤議員
(写真提供=伊藤議員事務所)



ご本人とポスター

衆院選に2012年、2014年と挑戦。ともに次点だった。昨年10月の衆院選では初当選を果たし、挑戦から5年かけて大願を成就させた。

佐々木教授の選挙分析によると「もともと日本維新の候補ですが、今回は東京、大阪の不可侵協定で希望の党に鞍替えし、厳しいなか、比例3人枠の3番目で当選です」

父親の伊藤公介氏は自民党で元国土庁長官。息子の俊輔氏はあえ

て新しい政党から羽ばたこうとしている。

佐々木ゼミから区議は多数輩出してきたが、衆院議員誕生は初めてだ。昨年11月1日に初登院、上着の胸に議員バッチが光る。

「目標とする統治機構改革のブレーンが佐々木先生でした。この改革に挑む国会議員はみんな先生を知っています。再会してごあいさつさせて頂きました。私のターニングポイントは佐々木先生との

出会いです」

続けて、こう力説した。大卒後すぐの就職が人生を決めるなんて思わず、いつ転職・起業してもいいという考え方もある。実社会で働き、専門的知識を学ぶために再入学するのもいい。

「美術家の篠田桃紅さんが、絵画鑑賞はらせん階段を上るように見る、とおっしゃっています。固定概念にとらわれず、あらゆるところから見る、いろいろな人の意見を聞いて、一番いい方向へ進めていく。そうありたいと思っています」

柔軟な対応で、既存政党ができなかった政策を訴えていきたい。推進力は中大で学んだ行政学だ。



国会議事堂

最終講義に鳴り響く拍手

伊藤議員の恩師で、中大で教鞭をとってきた佐々木信夫教授（行政学）の最終講義が1月23日、多摩キャンパスで行われた。

前日降った雪の影響を受けながらも、学生のほか、多数の卒業生や学者、官公庁、マスコミ関係者ら総勢400人が駆け付け、会場の大教室は満員に。

『行政学は世直しに役立つか—私の挑戦と想い』と題して、約1時間、マイクを握った。「大学の職に就くまで」「この国を変える、切り札は道州制」など9つの細目で展開した。

鳴り響く拍手のなか、大きな花束を贈られた同教授は深々と一礼して、24年間の中大教授生活を終えた。

